榎本留吉商店とその資料について

豊島区立郷土資料館 学芸員　横山恵美

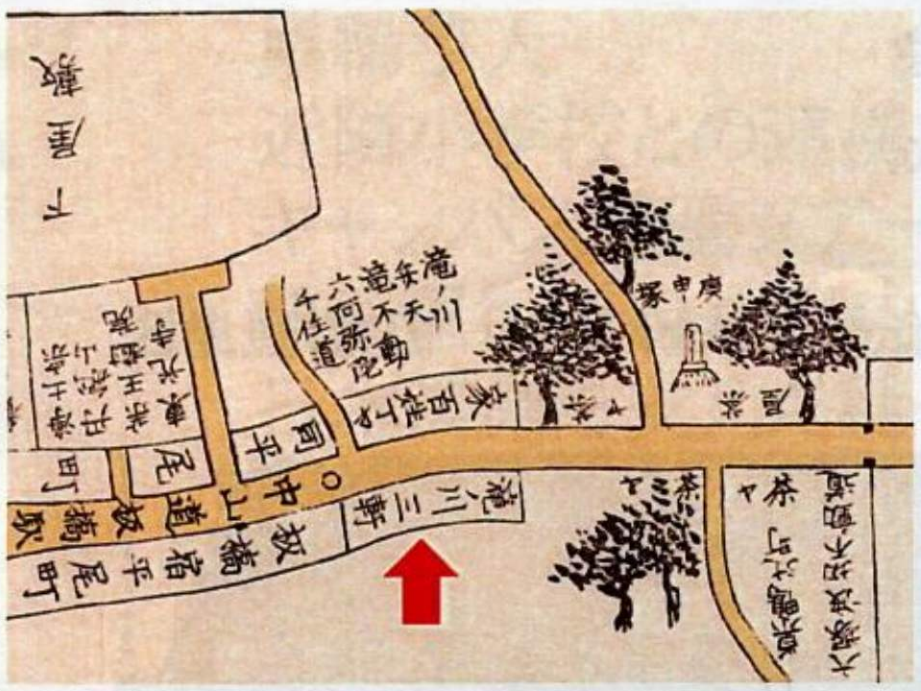
はじめに

1991 年、榎本家の大谷石の蔵(種子蔵)の解体に伴い、5 代目当主榎本泰吉氏より大量の資料を寄贈いただいた。郷土資料館友の会古文書サークル有志 5 名による「榎本泰吉家文書調査会」（通称エノモン会）を結成、以後約 30 年間、地道な資料整理を進め、2021 年 3 月、約 64,000 点の整理をほぼ終了した。
榎本家資料から、中山道の種子屋通りの歴史と奥深い種子屋の世界が明らかになってきた。郷土資料館では中間報告として、1997 年に収蔵資料展「種子屋のあゆみ」、2008 年に企画展「一粒入魂！」を開催した。

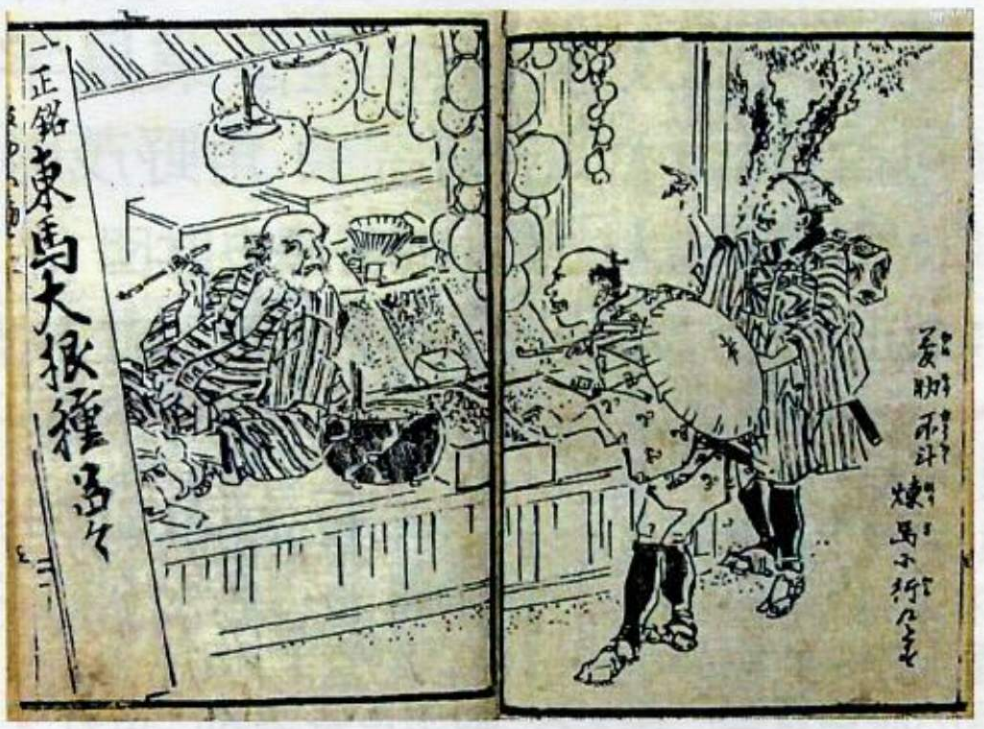
1．中山道・種子屋通り

近郊農村では野菜栽培が盛んであったが、江戸の発展とともに大根の需要が高まると、練馬村が食用大根を栽培し、滝野川村が種子用大根を採収する分業が行なわれるようになったという。『東京府北豊島郡誌』1918 年

滝野川村の種子屋の元祖は枡屋(榎本)孫八、越部半右衛門、榎本重左衛門で、字「三軒家」の由来といわれている。当初は農家の副業として、自家採種した種子を往来の盛んな中山道筋で売っていたのが評判となり、やがて種子屋(種苗業)を専門とするようになった。



江戸切絵図「巣鴨・染井・王子辺図」(部分)
嘉永 5(1852)年　↑滝野川三軒家、右(南)が庚申塚



一筆庵主人著『教訓滑稽 魂胆夢助潭』 五編上巻
弘化 4(1847)年　　成田山仏教図書館所蔵

明治時代以降、郵便制度の発達と鉄道輸送による全国規模の種子の販売が可能となり、本格的な種子問屋へと成長した。中山道沿いと周辺には種子屋が集中し、問屋街を形成していった。 不足の種子を融通し合えるのが問屋街のメリットだった。　※明治 18(1885)年板橋駅、明治 36 年巣鴨駅の開業

●中山道周辺の主な種子屋　※滝野川町全体で 19 名　『東京種子同業組合名簿』1916 年

①種長本店　越部長左衛門	⑤丸浅商店　越部浅五郎	⑨滝野川農園　越部留吉
②大日本農園　鈴木政五郎	⑥枡屋本店　榎本銈太郎	⑩内外種苗店　飯塚造酒蔵
③岩田六三郎	⑦種金　岩田金蔵	⑪松本定吉
④岩田五三郎	⑧山十商店　芦川十三郎	⑫種市　鈴木市郎右衛門

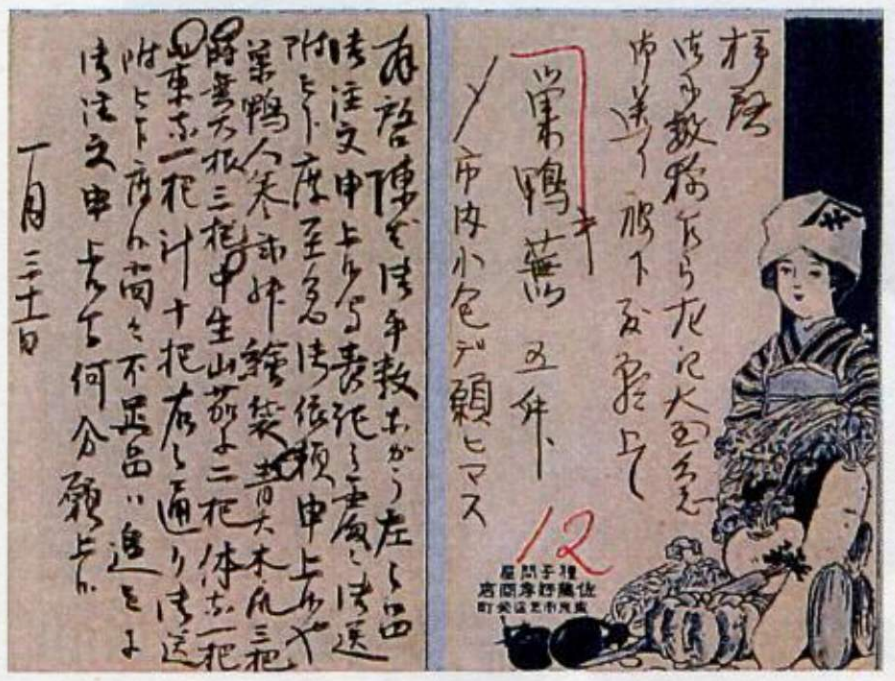
大正 5 (1916)年、滝野川の種子屋が中心となり、東京種子同業組合を設立した（会員 46 名のうち滝野川町 19 名、巣鴨村 2 名、巣鴨町 1 名）。目的は①種子の仕切相場協定と②優良原種の生産と供給で、特産物 5 品種〔練馬大根(長尻・長丸尻)、滝野川牛蒡、大長人参、夏大根〕の優良な原種を、"東京ブランド"として供給することで、全国的な知名度と信用を高めた。戦時中の種苗の生産配給統制により、昭和 18 年に解散した。

2. 種子屋の世界

●種子問屋の仕事　信用第一の商い

①販売用種子のもとになる原種(親種)の採種業務を、直接あるいは管理人(世話人)を置いて管理する。
　⇒採種場(山場)の確保　優良な母本の選抜　交雑を避ける網掛け　花見の検査(山廻り)
②採種農家(作人)に販売用種子の採種を委託する。
③採種農家から種子を集荷(山あげ)する前に、組合で支払価格(仕切相場)を決める。不作だと山が荒れる。
④集荷した種子を仕入れて蔵などに保管する。 高温多湿を避ける　品質管理が重要。
⑤相場表・カタログなどを作成し、顧客に発送する。春播きと秋播きの年 2 回の発送ピークがあった。
⑥問屋・小売店・行商人・農家等に種子を販売する。

種子販売に関する帳簿類　明治中期～大正期作成
千葉、茨城、長野、栃木、静岡、愛知など県別に作成された販売帳や駅に到着した種子の判取帳などがある。



巣鴨人参、絵袋(中生山茄子)の注文はがき
大正 8(1919)年 1 月

巣鴨蕪の注文はがき
昭和 5(1930)年 9 月

左は改良半結球山東白菜　右は結球芝罘白菜
『カネト商報』第 183 号、第 221 号

表紙は東京中生山茄子
『カネト商報』第 217 号

秋早生大根の母本選抜
『東京種苗目録』昭和 25 年

●ここ十数年、伝統野菜が見直され、各地で復活の取り組みが盛んである。区指定文化財「榎本家店舗兼住宅及び新座敷」を拠点に、榎本家資料を活用して、日本の農業を支えてきた種子屋と種子屋通りの歴史を紹介し、現在の種苗業や農業、食文化について、多くの方に関心をもっていただく機会を提供できればと考えている。